

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00622

研究課題名（和文）福島県相双方言の調査研究 - 方言研究は被災地にどのように貢献できるか -

研究課題名（英文）Surveillance study of Soma and Futaba dialect of Fukushima Prefecture: How can dialectology contribute to the affected areas?

研究代表者

半沢 康 (HANZAWA, Yasushi)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：10254822

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、東日本大震災による福島県被災地域を訪問し、関与型傍受法による方言の自然談話収集調査を実施するとともに、方言調査を介した被災地支援のための方法論について考察し「実践方言学」構築の一助とすることにある。危機方言化が懸念される相双方言の保存・継承に向けて、県内被災自治体のほとんどを網羅して方言談話資料を収集し、当該方言の総合的な記述・分析を進めた。同時に「方言調査による被災者支援」「方言を介した地域復興」の在り方について、被災自治体とも協働しながら検討を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究代表者らは、震災以後、福島県内の被災地方言を記録・保存するための活動を継続している。その活動の中で、被災された方々に震災の様子や昔の故郷の生活などを自由に語っていただく方言談話調査が、同時に被災された方々への「傾聴支援」につながることを強く実感してきた。また震災によって地域の様々な文化資料が流出、散逸してしまった自治体において、方言とともに地域のオーラルヒストリーを採録、保存することが、地域文化の継承、地域アイデンティティの保持に有用である。このように本研究は学術的価値にとどまらず、実際の被災地支援にもつながるものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to visit the areas affected by the Great East Japan Earthquake in Fukushima Prefecture and conduct a survey to collect natural dialect discourse, as well as to consider methodologies for supporting the affected areas through dialect research and to help build a 'practical dialectology'. In order to preserve and pass on the Soso dialect, which is feared to have become a crisis dialect, we collected dialect discourse materials from almost all of the affected municipalities in Fukushima prefecture, and conducted a comprehensive description and analysis of the dialects concerned. At the same time, we have been studying the ideal of 'support for disaster victims through dialect research' and 'regional reconstruction through dialects' in cooperation with the affected municipalities.

研究分野：日本語学

キーワード：東日本大震災 危機方言 実践方言学

1. 研究開始当初の背景

危機的な言語・方言の記録と保存・継承

ユネスコによる "Atlas of the World's Languages in Danger" の発表(2009年)といった世界的な危機言語・方言への関心の高まりを受け、国内でも国語研究所のプロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」など危機言語・方言を記録する取り組みが盛んとなった。一部例外を除く日本語諸方言は、程度差こそあれいずれも危機方言化が進んでいる。より多くの地域の方言資料収集が求められるが、この点各地の取り組みはいまだ不十分と言わざるを得ない。

とくに東日本大震災によって大きな被害を受けた東北地方の太平洋沿岸地域、中でも福島県相双地方の方言は、東京電力原子力発電所事故による自治体全域避難の影響により地域コミュニティが破壊され、危機方言化が加速している。研究代表者らはこの状況を踏まえ、文化庁事業委託や科研費助成を受けながら、方言の保存・継承に向けた相双方言談話資料の収集と方言の記述・分析に取り組んできた。しかしながら福島県内に限っても被災地域は広範にわたり、いまだ十分な方言資料を採録するには至らず、方言資料が圧倒的に不足する状況にあった。

実践方言学の構築

近年、方言研究の世界では、研究の成果を活用して広く社会貢献へ結び付ける「応用的研究」への取り組みの機運が高まっている。その嚆矢は日高 2008、今村 2015、岩城 2012 などによって示された「臨床方言学」であろう。医療、介護の現場で生じる方言によるディスコミュニケーションの問題や、医療・介護の従事者が意図的に方言を用いることの効果などを論じ、現実の福祉分野に方言研究者がコミットすることの有用性を示した。

これらの研究は東日本大震災発災時に方言研究者の重要な羅針盤となり、東北地方在住方言研究者らの手によってボランティア向けの「被災地方言パンフレット」や、支援医師のための「東北方言身体語彙図」など様々な支援のツールが作られた。

さらにはこうした活動のメンバーが中心となって「実践方言研究会」が組織され、被災地支援活動を含む「方言研究による社会貢献」のあり方が議論されている。この活動は緒に就いたばかりで、今後、事例の蓄積や理論的な検討を進めていかなければならない状況にある。

本研究の主要なテーマである「方言調査を介した被災者支援」という考え方は、東日本大震災以降、福島県内被災地の方言資料収集調査を継続する中で醸成されたものである。発災直後は、現在以上に多くの方々が仮設住宅での避難生活を強いられた。避難は必ずしも地域単位では行われなかったため、同居家族や近隣の知人と離れて暮らす中で日常の会話の機会を失い、また農作業など日々の生業を奪われて無為の一日を過ごさざるを得なくなった高齢の方々の心的な支援が問題となっていた。そこへ学生らとともにお邪魔し、方言によるお話をうかがう中で「久しぶりに人と話した」「昔の話ができてよかった」「楽しかった」といった声を聞き、「傾聴支援」の重要性を痛感するとともに「方言調査を介した被災者支援」に思い至った次第である。現在避難指示が解除された地域でも、若い世代が帰還せずに別居が続くなど、発災当初と類似の状況が依然残っており、長期的な支援体制が必要なることを再認識させられる。

1990年代の終わり、徳川宗賢によって言語学の新しいパラダイムである welfare linguistics が提唱された(徳川 1999)。従来のように言語学を純粋な学術研究の枠の中のみとどめるのではなく、その学術成果(徳川の表現を借りれば「学問の力」)を活用して広く社会貢献に結び付けていくべきであるという思想である。本研究の最終的な目的も「方言研究による社会貢献」の方法を検討することであり、日高 2008 他の「臨床方言学」と同様、この welfare linguistics の具現化を企図するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東日本大震災による福島県被災地域の方言資料を収集するとともに、方言調査を介した被災地支援のための方法論について考察し「実践方言学」構築の一助とすることにある。

東日本大震災によって甚大な被害を受けた福島県相馬・双葉地方(相双地方)の自治体を訪問し、関与型傍受法による方言の自然談話収集調査を実施する。危機方言化が懸念される相双方言の保存・継承に向けて方言談話資料を多数収集し、当該方言の総合的な記述・分析を進める。

本研究で実施する調査は、学術目的のみにとどまらず、被災された方々の心的支援や被災自治体の復興支援をも兼ねて実施される。その支援の効果を検証し「方言研究による社会貢献」のあり方について被災自治体とも協働しながら検討する。

研究代表者らは、震災以後、福島県内の被災地方言を記録・保存するための活動を続けてきた。その活動の中で、被災された方々に震災の様子や昔の故郷の生活などを自由に語っていただく方言談話調査が、同時に被災された方々への「傾聴支援」につながりうることを強く実感させられた。

また方言とともに地域のオーラルヒストリーを採録、保存することが、自治体にとっても有意義であることに気づかされた。避難自治体の中には津波や強制避難の影響で地域の様々な文

化資料が流出，散逸してしまったところもある。こうした自治体にとってはとりわけ地域文化の継承，地域アイデンティティの縁として談話資料が貴重である旨を当該自治体の職員よりうかがっている。

本研究では，従来行ってきた被災地方言の調査を継続し，より多くの方言談話資料を収集，保存する(目的[1])。これは 1.当初の背景 を踏まえての活動である。避難指示が解除された地域でも，特に若い世代の帰還は捗っておらず，方言継承の問題は解決していない。伝統的な方言を色濃く残す話者の高齢化も進んでおり，方言談話資料の収集・記録が喫緊の課題となっている。

さらにその調査は，上記の通り被災された方々や被災自治体への支援をも兼ねて行われ，1.当初の背景 に示した「方言研究による社会貢献」の実践例としても位置付ける(目的[2])。実践方言学の構築に向け，「方言調査を介した被災地支援」の実践例を蓄積する。

3.研究の方法

上記の目的達成のため，以下について実施する。

[1]相双方言の談話資料収集調査

避難指示が解除され，住民の帰還が進んでいる自治体を訪問し，高齢者を対象とした方言談話資料収集調査を実施する。

すでに十分な協力体制が構築できている檜葉町を中心に，周辺の避難解除自治体にも活動を広げる。本研究が被災地支援を視野に入れたものである点を十分に説明し，理解・協力を得る。調査実施後に，インフォーマントおよび自治体職員へフォローアップインタビューを行い，実施した方言調査が支援につながりうるものであったかを検証する。

[2]相双方言の分析・記述

各年度に収録した音声は，年度ごとに福島県内の業者に依頼しておおまかな文字化を行い，さらに研究代表者・分担者が音声表記等，細部を修正してアーカイブ化を進める。この資料を用い，現在進めている相双方言の分析・記述のさらなる精緻化を図る。

4.研究成果

目的[1] 相双方言談話資料の収集およびそのデータにもとづいた相双方言の記述・分析

本研究開始 1 年後の 2020 年から全世界を大混乱に陥れた covid19 の大流行により，調査の実施は困難を極めた。本研究の調査が「傾聴支援」を同時に意図するものであることから，対面による調査は不可欠であり，一方で協力をいただく方々の年齢を考慮すると，covid19 禍の収束まで原則として調査実施を延期せざるを得ず，この点，研究の停滞につながった。

covid19 感染症の感染症法の位置づけが 5 類相当へ変更となった 2023 年までは，研究 1 年目(2019 年)に収集したデータを含む既存データの整理，分析に傾注することとした。

本多編 2024 は，既収集済みであった福島県内常磐線沿線グロットグラム調査の結果をまとめた成果である。津波被害，原発事故の影響が大きかった浜通り地方における方言語彙の動態がつぶさにわかり，また内陸部(中通り)の結果と比較することも可能である(図 1)。

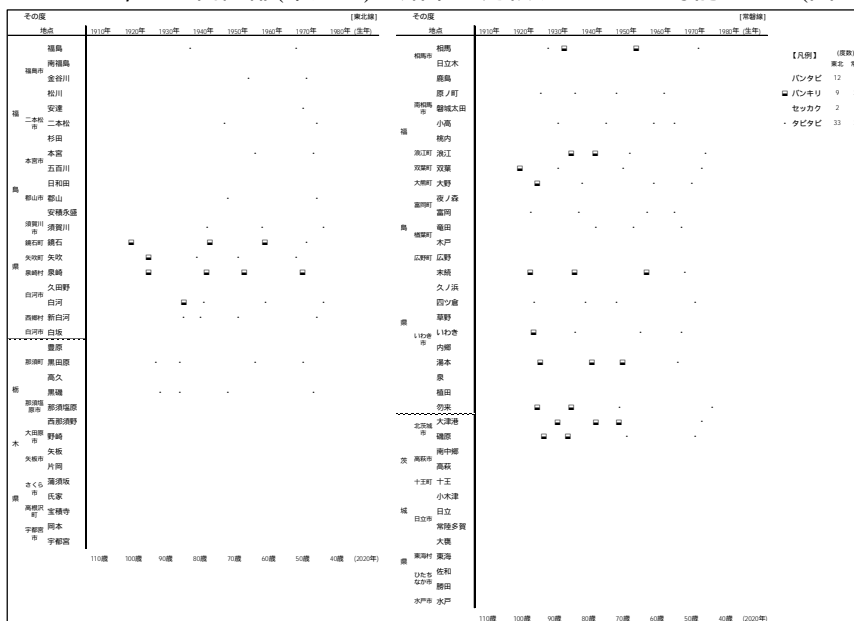


図 1 東北本線・常磐線グロットグラム

被災各地で収集した談話資料は文字化し、共通語訳を添えてアーカイブ化した。一部は福島県方言の一般向け概説書へ掲載し、刊行の予定である(平山・半沢他編 予定)。震災後、避難によってふるさとを遠く離れてお住まいの方の目にとまり、故郷を思う「よすが」としてお読みいただけることを願う。

各種制限の緩和された最終年度(2023年)には調査を再開した。これまでに調査が行えずにいた自治体にも協力を依頼し、高年層話者の談話資料を収集できた。当初予定していた水準には及ばなかったものの、震災以降継続して実施してきた他の調査データとあわせ、原子力発電所事故によって避難指示が発令された福島県内のほぼすべての自治体の談話データが整った。

目的[2] 被災された方々の心的支援、被災地域の復興支援につながる方言調査の実践と方法論の検討

本研究の主要な目的である「実践方言学」構築に向け、研究代表者が編者の一人として参画し『実践方言学講座』全3巻を刊行した。本研究の分担者、協力者も多数執筆陣に加わり、本研究における調査実践をふまえた論文を刊行した(半沢・本多 2020, 小林 2020, 小林・佐藤他 2020)。

福島県双葉郡楢葉町教育委員会とは、これまで特に緊密な協力体制を構築し、方言調査による傾聴支援の理想的な在り方について、共同で検討を進めてきた。半沢・本多 2020 はその成果をまとめたものである。半沢・本多 2020 に掲載したコンセプトの模式図を示す(図 2)。学術的な方言調査が住民、自治体、研究者のいずれにも負担を強いることなく、相互にメリットのある活動となることが肝要である。

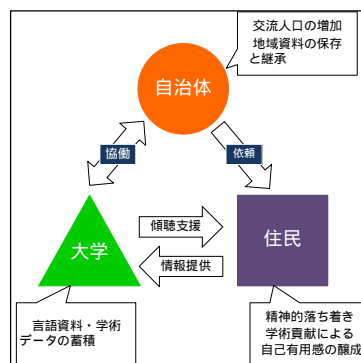


図 2 3者の協働

2020年度からは、相双地方には属さないものの、同様に避難指示区域となった田村市都路地区の関係団体とも連携をおこない、方言調査を実施した。同時に各種助成を受け、「方言を介した地域復興」についてさまざまに協働した。

都路地区の活動は、地域住民自らが主体となって企画、実施されたものである。地方創生、地域活性化においてこうした内発的な取り組みが有効かつ重要であることが指摘されており(宮本 1989)、今後の進展が期待できる。

本研究によって得られた知見にもとづく年少者向け方言ワークショップを被災地各地で実施した(下記参照)。被災地方言の保存・継承に向け、若い世代の方言教育を企図したもので、元小学校教員である研究協力者が中心となって企画した。また研究協力者はこれら実践を分析、理論化し、研究会において報告した。

- 「ふるさと都路の方言を学ぼう」(2021年11月14日, 田村市都路町, よりあい処華)
- 「ふるさとのことばを学ぼう」(2022年10月24日, 南相馬市鹿島区, けやき児童クラブ)
- 「方言ワークショップ」(2022年11月13日, 11月27日, 南相馬市原町区, 南相馬市博物館)
- 「楽しく学べる方言講座」(2023年1月15日, 南相馬市原町区, 原町生涯学習センター)
- 「方言ワークショップ」(2023年10月8日, 10月15日, 南相馬市原町区, 南相馬市博物館)

[文献]

今村かほる 2011 「医療と方言」『日本語学』30-2, pp.133-159
 岩城裕之 2012 「医療従事者のための方言の手引き」『日本語学』31-08, pp.36-45
 小林隆・佐藤亜実他 2020 「継承の基盤としての方言会話の記録」『実践方言学講座 第2巻 方言の教育と継承』くろしお出版, pp.273-294
 小林初夫 2020 「ふるさとのことばを学ぶ被災地での授業実践」『実践方言学講座 第2巻 方言の教育と継承』くろしお出版, pp.49-70
 徳川宗賢 1999 「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」『社会言語科学』2-1, pp.89-100
 半沢康・本多真史 2020 「災害からの復興期における行政と方言研究者の連携」『実践方言学講座 第3巻 人間を支える方言』くろしお出版, pp.175-196
 日高貢一郎 2008 「看護・福祉と「方言」の役割」『地域学』6, pp.91-112
 平山輝男・半沢康他編 予定 『福島県のことば』明治書院
 本多真史編 2024 『東北本線・常磐線グロットグラム』科研費等報告書
 宮本憲一 1989 『環境経済学』岩波書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 白岩広行	4. 巻 40
2. 論文標題 福島県北部方言の平叙文・疑問文と文末イントネーション	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 立正大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉懸元	4. 巻 -
2. 論文標題 四国方言の格 対格・主格・無助詞の形に注目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本語変異論の現在	6. 最初と最後の頁 209-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半沢康	4. 巻 68
2. 論文標題 福島県における「かなへび」の語史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言文	6. 最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 半沢康・本多真史	4. 巻 3
2. 論文標題 災害からの復興期における行政と方言研究者の連携	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践方言学講座 第3巻 人間を支える方言	6. 最初と最後の頁 175-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林初夫	4. 巻 2
2. 論文標題 ふるさとのことばを学ぶ被災地での授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践方言学講座 第2巻 方言の教育と継承	6. 最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆・佐藤亜実他4	4. 巻 2
2. 論文標題 継承の基盤としての方言会話の記録	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践方言学講座 第2巻 方言の教育と継承	6. 最初と最後の頁 273-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田拓・岩城裕之	4. 巻 3
2. 論文標題 言語サービスの国際比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践方言学講座 第3巻 人間を支える方言	6. 最初と最後の頁 245-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白岩広行	4. 巻 58
2. 論文標題 東京の大学で方言教育を実践する 記述研究の立場から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学人文科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜実	4. 巻 -
2. 論文標題 喜び・落胆の地域傾向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 217-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半沢康	4. 巻 59
2. 論文標題 福島県におけるr脱落現象の伝播と変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉懸元	4. 巻 -
2. 論文標題 格 主格・対格・与格の環境に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 宮城県気仙沼市方言・名取市方言(分析編)	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白岩広行	4. 巻 16
2. 論文標題 福島県北部方言の「ようだ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 阪大社会言語学研究ノート	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜実	4. 巻 -
2. 論文標題 会話収録の方法についての実験的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 宮城県気仙沼市・名取市方言(分析編)	6. 最初と最後の頁 283-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜実他2	4. 巻 10
2. 論文標題 「グローバル」教育の課題と今後の展開の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究	6. 最初と最後の頁 11-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田拓他2	4. 巻 8
2. 論文標題 医療・看護・福祉・災害と「方言」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 285-305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 白岩広行
2. 発表標題 対象物の結果状態の表現 諸方言と古典語を視野に
3. 学会等名 岩手県立大学高等教育推進センター国際教育研究部言語学講演会・ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 半沢康
2. 発表標題 方言調査データの信頼性
3. 学会等名 第433回東北大学国語学研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 半沢康
2. 発表標題 方言研究は被災地にどのように貢献できるか
3. 学会等名 福島大学国語教育文化学会2023年度後期学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林初夫
2. 発表標題 学校外教育としての方言教育－南相馬市博物館の方言ワークショップ－
3. 学会等名 実践方言研究会 第12回研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤亜実
2. 発表標題 喜び・落胆の言語行動の地域差 孫の徒競走を観戦する場面を対象に
3. 学会等名 韓国日語日文学会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 半沢康
2. 発表標題 『庄内浜狄』調査データの多変量解析
3. 学会等名 日本地理言語学会第1回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白岩広行
2. 発表標題 東京の大学で方言教育を実践する 記述研究の立場から
3. 学会等名 第5回実践方言研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Otsuki Tomoyo and Shiraiwa Hiroyuki
2. 発表標題 Attempts to describe a mother tongue in Aomori and Fukushima, the northeastern region of Japan
3. 学会等名 International Year of Indigenous Languages 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田拓・岩城裕之
2. 発表標題 台湾と日本の医療現場に見る言語サービス-地域言語か、別言語か、という視点から-
3. 学会等名 第9回実践方言研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 本多真史編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 奥羽大学	5. 総ページ数 150
3. 書名 東北本線・常磐線グロットグラム	

1. 著者名 半沢康・新井小枝子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 298
3. 書名 実践方言学講座 第1巻 社会の活性化と方言	

1. 著者名 武田拓他13	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩沼市史編纂委員会	5. 総ページ数 535
3. 書名 岩沼市史10 特別編II 民俗	

1. 著者名 武田拓他13	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩沼市史編纂委員会	5. 総ページ数 553
3. 書名 岩沼市史11 特別編III 震災	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	武田 拓 (TAKEDA Taku) (20290695)	仙台高等専門学校・総合工学科・教授 (51303)	
研究分担者	玉懸 元 (TAMAGAKE Gen) (10454357)	聖徳大学・文学部・教授 (32517)	
研究分担者	白岩 広行 (SHIRAIWA Hiroyuki) (30625025)	立正大学・文学部・准教授 (32687)	
研究分担者	本多 真史 (HONTA Masahito) (70806158)	奥羽大学・歯学部・講師 (31602)	
研究分担者	佐藤 亜実 (SATO Ami) (20829197)	東北文教大学・その他部局等・講師 (31503)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小林 初夫 (KOBAYASHI Hatsuo) (50993127)	奥羽大学・図書館・図書館長 (31602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------